芦田川かわまち広場における魅力向上施設に関する研究

都市経営学部　根本修平・横山真

背景と目的

河川および河川敷から構成される「河川空間」は、都市生活において市民が気軽にアクセスできる数少ない自然空間であり、かつ都市生活や住環境の質を高める重要なオープンスペースである。国土交通省では『河川空間とまち空間が融合した、良好な空間形成を目指す取組み』[a)]として、「かわまちづくり」を推進しており、まちづくりにおける河川周辺の空間整備の重要性が高まっている。

福山市では「芦田川かわまち広場」において、かわまちづくりが進められている。芦田川かわまち広場を含むエリアの未来ビジョン策定に向けた取組みが 2022 年度から始まり、その一端として福山市は「広場の快適性と広場利用者の滞在時間や消費金額には相互関係がある」という仮説を立て、これを検証する社会実験を行う予定である。筆者らはこれまでに担当する公園緑地課と連携し「オフグリッドハウス」と「日陰施設」の設置により広場の快適性を向上させ、その効果測定を実施することを想定しているが、これらの設計には地区の地域特性および河川空間の環境特性を考慮することが望ましい。

そこで本研究では、対象エリアの地域特性および環境特性を把握し、これらの特性を考慮したオフグリッドハウスおよび日陰施設の試作を行うことを目的とする。またこれらを設置した際の社会的、経済的効果について行政との連携により測定する。最終的には未来ビジョン策定の一端を為すかわまちづくりにおける「エリアの魅力向上につながる公共空間の活用方法や環境整備」のあり方に関する具体的な知見を得ることを目指す。

まとめ

夏季と冬季に実施した地域特性と環境特性の調査から、かわまち広場および隣接する総合体育館公園の特性を把握することができた。季節によって利用の傾向が異なることや目的的あるいは完結的な場所になっていることが、一方で更なる利活用の余地を示しているとも理解される。この場所で目的を達成している状態をピークとするとオフピークの過ごし方に対する働きかけが足りていないともいえ、これによって広場や公園の特性もまた変化すると想定される。

オフグリッドハウス・日陰施設の試作及び社会実験を通した効果測定は、2023 年度にまたがり実施することとなった。河川管理者と福山市が複数回の協議を実施し、その協議結果に基づき河川敷における工作物の計画条件について整理した。一方でかわまち広場が求める施設の規模や仕様の実現可能性についても協議されたが、双方の求める条件が適合しなかったため、2022 年度は試作するに至らなかった。引き続き福山市と連携しつつ 2023 年度に試作及びこれを用いた社会実験を通した効果測定を実施する。

これらのことから、本研究が当初予定した調査成果を用いた提案と検証という一連の取り組みは、2022 年度は調査から実態を把握すること及び提案の準備という中途な段階で留まってしまった。しかしながら夏季と冬季に調査を実施し、対象エリアの特性を詳細に把握できたこと、河川協議で施設設置の可能域を把握することができたことは、翻って今後に対するより信頼できる理解を得る好機となった。加えて、連携する福山市においても継続的に取り組むべき事業として理解を得られたことは、研究的な側面のみならず官学が連携して都市経営課題に取り組む体制における成果でもあると考えられる。